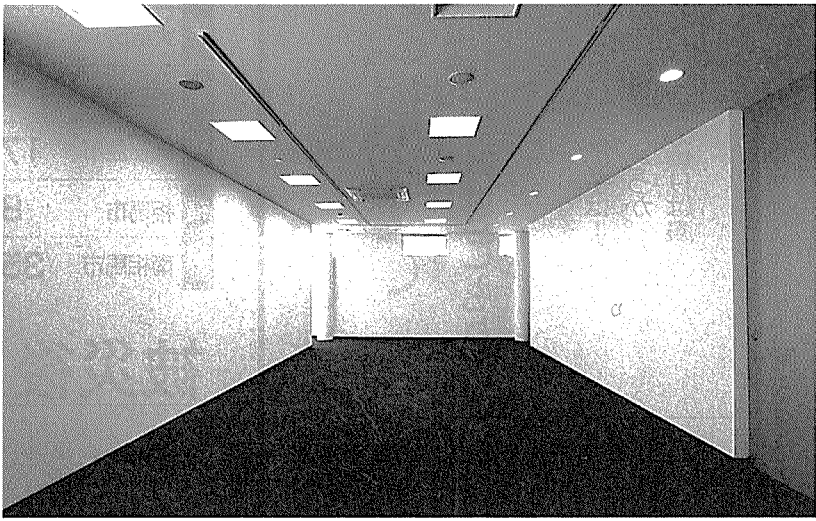


# E&Cギャラリー(福井)閉廊へ



4月末で閉廊するE&Cギャラリー＝福井市問屋町3丁目

## 県民への浸透遠く

### 9年間 展覧会100回、人つなぐ

福井ならではの芸術文化を発信する拠点として福井大教授らが中心となって開設し、多くの作家たちに親しまれてきたE&Cギャラリー(福井市問屋町3丁目)が4月末で閉廊する。県内ではほかにない本格的な商業アートギャラリーとして、9年間で100回にわたり質の高い展覧会を開き、アートに関わる人々をつなぐ場としても機能してきたが、広く県民に浸透するに至らず、運転資金確保の面からも継続は難しいと判断した。(岩城一彦)

ギャラリーは、福井大教育学部の宮崎光二教授(現名誉教授)を代表に、大学教員や美術分野の学芸員、作家らがNPO法人を設立し、2009年に福井市中央1丁目北の庄通り沿いのビル3階に開設した。

当時越前町で創作していた国際

して生まれ変わった。

運営は理事らの手弁当で、ギャラリー使用料のほか、活動に賛同する会員の会費や国の補助金などを活用してきたが、当初から会員数は伸び悩んだ。目標とした500人を大幅に下回り、郊外移転でさらに悪化した。国の補助事業採択も14、16年度は見送られるなど、慢性的な資金不足に悩まされた。

状況を打開しようと昨年度には、若手作家を支援するプロジェクト「アーティストスクエア」を立ち上げた。事前審査にパスすれば会場使用料が半額になる制度で、一時的にレンタル件数を増やす効果はあったものの、抜本的な解決には至らなかった。

宮崎代表は「資金不足は今に始まったことではなく、閉廊の直接的な原因とは言えない。一般の県民に浸透できず、今後の展望を描けないことが大きい」と説明。「悔いは残るが、ギャラリーに課せられた責任の一端は果たし得たのではないかと。場はなくなっても美術表現が持つ強い力が失われないうち、もう少し努力を続けたい」と語った。

閉廊後もNPO法人は残り、他館への企画提案などを視野に入れている。5月以降は9年間の総括を行い、冊子などにまとめる予定。

## 「想像する力」がなければ

NPO法人E&Cギャラリー 宮崎光二代表(福井大名誉教授)

### 寄稿

たぐさんの人に助けをもらって運営してきた「E&Cギャラリー」の展覧会活動休止の時期が迫ってきました。9年間という時間をどのように評価するかは人それぞれでしょうが、私としては多くの人に申し訳ないという気持ちと、本当に大事なことが形にならなかったという無念のようなものを感じています。

このように9年間の活動から得た私なりの結論ははなはだ悲観的なものですが、ただ手をこまねいているわけではありません。私たちは、美術表現の基礎を系統的に積み上げていくプログラムを作成し、それを主に中高生を対象とした福井大の公開講座で実施する準備を進めています。

初めは単純で楽観的な展望を持っていましたが、展覧会を重ねるにしたがって感じるようになったのは、抵抗や手こたえのない軟体の不快さのようなものでした。いくつかの試みや投げかけが不毛に終わった理由を、あらためて考えてみました。

気が付いてもらいたいことは、とても単純な条件の中で私たちの身体的な営みのもたらす表現が、いかに無限のフォームを生み出すことが出来るかということです。それは同時に私たちの内部に「想像力」の発動を強く促す作用をばらばらとて、反復することで真に「見る」ことを理解する瞬間をもたらしてくれるのです。

もちろん、さまざまな要素が絡み合っているのですが、一因として挙げられるのは、表現は「純粹」を求めざるを得ない、かつ「自由」でなければならぬという過度な思い入れのあまり、鑑賞者も私たち教育者も、美術の基礎を習得し、伝えることをおろそかにしてきたしまったのではないかと、このころです。どんな分野でも、負荷や抵抗のないところに本当の興味や関心が育つわけがありません。ことさらに美術と

世界はあらゆる特別な驚異に満ちているけれど、決して目の前にある1個の透明なコップを持つ驚異をのべものではない。このことを「見る」ことが教えてくれるのです。とにかく最初の一步を踏み出すことにしましょう。皆さんごじつか、どこかで会えるといいですね。